

## 博士学位論文審査要旨

申請者 川原 健太郎(早稲田大学非常勤講師)

論文題目 三多摩地域社会教育史の研究—「自分史」の源流に関する検証—

主査	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士(教育学)	小林(新保)敦子
副査	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士(教育学)	矢口徹也
副査	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士(教育学)	坂内夏子
副査	明治大学文学部教授	教育学修士	小林繁

### 1. 本論文の目的

本論文は、明治期以降の東京西部・三多摩における地域社会教育の歩みを「自分史」の表現活動という視点から検証し、「自分史」の起源ともいわれている「ふだん記」がどのように成立したのか、また社会教育の観点から見ていかなる意味を有するのかを歴史的な文脈から検討することを目的としている。

「自分史」とは、自己省察に留まらず、生活する地域や社会を客観的に認識するための成人の学習活動として、1980年代以降、社会教育において注目された。

本論文では、「自分史」の原型の一つとして、1960年代後半頃に創始された橋本義夫による庶民の文章運動「ふだん記」に注目したものである。橋本は三多摩地域での歴史的に多様な学習・文化活動の蓄積の上に「ふだん記」を着想し実践した。

橋本の活動は、地域住民が文章によって日常生活を言語化し、文集に掲載して読みあい、対面や手紙により交流を深める文章執筆運動であった。「ふだん記」は戦後の出版文化の興隆の中で登場し、高度経済成長期以降50年にわたって「庶民の文章運動」であり続け、民衆の自己表現の機会として全国的に展開されるようになった。

三多摩地域は戦後、公民館、青年学級、婦人学級の取り組みといった社会教育活動が、全国的に注目されてきた。しかし、これまでの先行研究では施設や学級・講座などの系統的組織的な社会教育活動が注目されてきた一方で、地域のノンフォーマルな学習・文化活動については、等閑視される傾向にあった。また、地域住民の学習活動がどのような状況から生み出されてきたのか、歴史的な考察も充分ではなかった。

本論文では、近現代の三多摩での学習・文化活動を分析し、具体的な文章執筆活動である同人誌、機関誌、新聞投書などの検証という手法を用いて、三多摩の地域社会教育をとらえ、「ふだん記」を事例にして、「自分史」の成立の背景に迫っている。また、社会教育における学習という観点から、人々が自分自身のことを著し、さらに出版という形により多くの他者に触れることをなぜ希求するのか、人間に内在する自己表現の意欲の描出を試みている。

本論文の意義として、第1に、「自分史」の源流を近代三多摩の社会教育実践に見いだし検証した点がある。「自分史」の原型が「ふだん記」にあることは既存研究で示されてきた一方で、「ふだん記」創成の背景に迫る研究はなかった。それに対して本論文では、明治、大正、昭和にかけての三多摩における地域文化教育史の歩みの中で、「ふだん記」、さらには「自分史」に連なる書くことによる自己表現活動生成の背景を検討している。第2に、社会教育における学習活動という視角から橋本義夫の活動を考察した点である。これまでの先行研究において、橋本の足跡と活動は、社会教育の枠組みの中で検証されることがほとんどなかったが、本論文では社会教育実践として位置づけ評価し、かつ橋本の思想を学習論の視点から分析している。

本論文では、三多摩地域に軸足を置き、明治期以降約150年に亘る時代の中で繰り返されてきた多様な草の根の学習・文化活動の水脈の上に橋本の実践が生まれ、それに対応する形で「自分史」の活動が展開されていった、という仮説を検証するかたちで研究が進められており、そこに本研究の独自性がある。

## 2. 論文の構成

本論文は、時期的に主に4本の柱建てにより構成されている。第1の柱は、明治期である。近代、自由民権運動が盛んに展開された三多摩における学習・文化活動を検討し、当時の市井の人々による文章の意見表明の場としての地方新聞の投書欄を対象に論じている。

第2の柱は、大正期である。地域文芸誌での文章執筆活動に着目すると同時に、当時の地域青年の私塾の実践を取り上げている。

第3の柱は、戦後初期である。文化活動の高まりと同時に、サークル活動に取り組む地域青年に焦点を当てている。この時期には青年団、学校、労働組合、地域でのサークル等による会報や同人誌など多くの小規模出版物が発行されているが、「ゴードン・W・プランゲ文庫」の資料に基づいた考察を試みている。

第4の柱は、1960年代後半に三多摩・八王子で橋本義夫によって創始された「ふだん記」である。「自分史」の原型といわれる「ふだん記」は、「自分史」の史的検討において不可欠であり、本論文の中核となる重要な部分である。ここでは、橋本義夫の理論と彼の実践を解き明かしながら、「自分史」の起源を再検証している。

本論文は序論及び結論を除き4部17章及び2つの補論から構成されている。目次は以下のとおりである。

序論

本論

第1部 明治期の三多摩における社会教育実践

第1章 近代三多摩の概要

第1節 三多摩の区域

- 第2節 近代三多摩の就学率
- 第2章 自由民権運動期の三多摩における五日市の青年による学習・文化活動
  - 第1節 明治期三多摩における自由民権運動の位置付け
  - 第2節 五日市の自由民権運動
  - 第3節 勸能学校と学芸講談会
- 第3章 自由民権運動期における地域と青年に関する研究
  - 第1節 千葉卓三郎の遍歴
  - 第2節 故郷喪失者を受け入れた要因
  - 第3節 千葉卓三郎の五日市における役割
  - 第4節 千葉卓三郎の精神と地域の青年の受け入れ
  - 第5節 「外来青年」と社会教育実践における意義
- 第4章 明治末期における『週刊多摩新聞』の研究
  - 第1節 明治末期の三多摩における地方新聞
  - 第2節 週刊多摩新聞の地域と概要
  - 第3節 週刊多摩新聞と投書
- 第2部 大正デモクラシー期の三多摩における社会教育実践
  - 第1章 大正期稲城における青年の地域文芸誌の研究
    - 第1節 三多摩における大正デモクラシー期の学習・文化活動に関する先行研究
    - 第2節 大正デモクラシー期のメディアと青年
    - 第3節 稲城における文芸誌活動
  - 第2章 地域通俗教育としての稲城・奚疑塾に関する考察
    - 第1節 奚疑塾の成立の背景
    - 第2節 奚疑塾の教育
    - 第3節 奚疑塾の果たした役割
  - 第3章 近代の私塾における同窓生の研究—奚疑塾を対象として—
    - 第1節 近代における私塾に関する先行研究の到達点と課題
    - 第2節 奚疑塾同窓生の研究
  - 第4章 奚疑塾における錦絵の研究—視聴覚教育の観点から—
    - 第1節 明治期における錦絵と教育
    - 第2節 奚疑塾の教育内容と教育方法
    - 第3節 奚疑塾における錦絵の主題
    - 第4節 奚疑塾における錦絵の内容
- 第3部 戦後直後期の三多摩における青年の社会教育実践—戦中からの復興と戦後社会教育の出発—
  - 第1章 第二次世界大戦下における三多摩の社会教育
    - 第1節 第二次世界大戦下における社会教育の全国的状況

- 第2節 第二次世界大戦下の三多摩の社会教育
- 第2章 戦後直後期稲城における青年の社会教育実践の実証的研究
  - 第1節 1940年代後半における三多摩における学習・文化活動の背景
  - 第2節 稲城村青年団の活動
  - 第3節 美を語る会の概要と活動内容
  - 第4節 美を語る会の青年
  - 第5節 サークル活動における青年
  - 第6節 青年教員による人形劇、演劇
- 第3章 「ゴードン・W・プランゲ文庫」にみる戦後直後期の三多摩における青年の学習・文化活動
  - 第1節 プランゲ文庫の概要
  - 第2節 プランゲ文庫の小冊子を通してみた三多摩における青年の学習・文化活動
- 第4部 戦後三多摩社会教育史における橋本義夫及び「ふだん記」に関する研究—「ふだん記」から「自分史」へ—
  - 第1章 橋本義夫の社会教育実践の一側面に関する研究
    - 第1節 橋本に関する先行研究の到達点と課題
    - 第2節 橋本関連資料について
    - 第3節 社会教育実践の視点からみた橋本義夫の実践
  - 第2章 橋本義夫の学習論研究—「ふだん記」を対象に—
    - 第1節 「ふだん記」の成立と平凡人の教育
    - 第2節 橋本義夫の学習論における鍵概念
    - 第3節 橋本の学習論の検討
    - 第4節 「ふだん記」の背景にみえる易行道の書
    - 第5節 「ふだん記」の文友による易行道の受容
  - 第3章 「ふだん記」における青年の学びに関する一研究
    - 第1節 橋本義夫の中にみえる青年の学び
    - 第2節 橋本の考える「ふだん記」の青年の学びにおける意義
    - 第3節 青年の書く「ふだん記」にみる学び
  - 附 橋本義夫「青年版『ふだん記』のすすめ」一覧表
  - 第4章 ナラティブの視点からみた書く実践に関する一研究
    - 第1節 ナラティブをめぐる諸相
    - 第2節 書く実践の執筆過程に関する事例分析
  - 第5章 書く実践の意義に関する一研究—「ふだん記」を対象として—
    - 第1節 先行研究及び本章の視角
    - 第2節 「ふだん記」インタビュー調査の概要
    - 第3節 書く実践の意義に関する「ふだん記」のケーススタディ

- 第6章 「ふだん記」と「自分史」の一考察—橋本義夫による実践の再評価—
  - 第1節 先行研究と本章の位置づけ
  - 第2節 「自分史」の定義・起源と「ふだん記」
  - 第3節 「自分史」執筆の要点と「ふだん記」
  - 第4節 「ふだん記」の執筆内容の検討
- 補論1 1980年代創始の各地グループに関する研究—「ふだん記」北九州グループ、あいちグループを対象として—
  - 第1節 「ふだん記」各地グループの概要
  - 第2節 北九州グループ
  - 第3節 あいちグループ
  - 第4節 各地グループの意義
- 補論2 地域における学習・文化活動の受容過程に関する研究—北海道における初期「ふだん記」を対象にして—
  - 第1節 先行研究
  - 第2節 初期北海道「ふだん記」関連史料及び本研究に係る調査
  - 第3節 初期北海道「ふだん記」の歩み

## 結論

## 参考文献

資料 橋本義夫略年譜と三多摩の学習・文化活動

## 3. 本論各章の概要と論評

### 第1部 明治期の三多摩における社会教育実践

#### 第1章 近代三多摩の概要

本章は、論文の近代三多摩の出発点の概況を俯瞰したものである。北多摩、南多摩、西多摩と三つの地域から構成されている近代の三多摩の地域性、いわゆる都市近郊地域でありつつ、農村地域の特徴をもまた色濃く持っていることを取り上げている。また、義務教育の就学率から必ずしも学校教育は先進的に整備が進められてはいなかった状況を示した。

#### 第2章 自由民権運動期の三多摩における五日市の青年による学習・文化活動

本章では主に1874年の民撰議院設立建白書の提出から1881年の明治十四年の政変にピークを迎えた政治運動として知られる自由民権運動下の学習・文化活動を対象にしている。自由民権運動が高まっていた三多摩では多数の結社の活動に示されるように、多くの実践がみられた。ここでは、三多摩の自由民権運動の中でも特筆すべき成果の一つである五日市憲法という本格的な私擬憲法を生んだ西多摩・五日市地域の学習・文化活動を対象に取り上げ、社会教育史に位置づける試みを行った。

近代の出発点において五日市では、多くの学習・文化活動が展開され、社会教育実践が

生まれ育つ素地が醸成されていたことを著者は論じている。

### 第3章 自由民権運動期における地域と青年に関する研究

本章においては、学習・文化活動に内在する人々の学習意欲に迫るため、学ぶ場が生み出される原動力を、地域外の人物を中心に論じた。対象としたのは仙台から三多摩に流れ着いた青年・千葉卓三郎である。五日市憲法起草のキーパーソンであった千葉の人生遍歴を追いながら三多摩の学習・文化活動との出会いとそこでの成長を検証した。

千葉卓三郎は五日市にとって触媒の役割を果たす存在であったことを確認し、さらに五日市の人々が私擬憲法を生み出すに至った熱意において、学習を通じた社会への理解の深まりや憲法への理解など、学びの要素があったと著者は結論付けている。

### 第4章 明治末期における『週刊多摩新聞』の研究

本章では、人々の学びに寄与してきたと思われるメディア、中でも地域との結びつきの観点から地方新聞を取り上げている。対象は明治末期の調布地域の地方新聞、『週刊多摩新聞』であり、特に読者からの発信や交流の場になっていた投稿欄を検証した。投書は出版手段を持たない人々にとり、自らの意見を文章にして発表する上で重要な役割を果たしていたことを明らかにしている。また、この時期の学びの実践が民権運動に関わる一部の人々によってのみ行われていたわけではないことを示しているとする。さらに多くの投書は、それ自体小さいつづやきであり、組織的に活動し大きなうねりとなるものではなかったものの、何らかの意見表明をしたい人々が草の根に多数存在していたと結論付けている。

## 第2部 大正デモクラシー期の三多摩における社会教育実践

### 第1章 大正期稲城における青年の地域文芸誌の研究

本章では大正デモクラシー期の青年たちによる書く実践を対象に検討を行った。焦点を当てたのは南多摩・稲城における地域文芸誌である〈せゝらぎ〉、〈谷戸川〉、〈大丸同窓会誌〉である。文章の検討から、地域での学びの姿に迫ることを試みた。

この時期の地域青年文芸誌は、創作作品だけではなく、創作の形を取りながら書き手の意見表明をしている作品が収載されている点を著者は特徴として挙げている。そして、書き手それぞれに内在する思いを文章化し、掲載された文章を読みあうことなど、青年たちの創作活動を通じた地域での学びの姿の解明を試みた。地域青年文芸誌からは、地域の中で書き続ける実践が、明治期以降、大正期においても息づいてきたと本章では指摘している。

### 第2章 地域通俗教育としての稲城・奚疑塾に関する考察

本章では、明治から大正にかけて稲城に開設されていた私塾・奚疑塾を対象に地域通俗教育の視点から、近代における私塾を取り上げた。奚疑塾が開設された背景としての奚疑

塾開設時期の私塾に関する動向や、稲城の地域状況を確認している。近代以後も私塾が依然残されており、近代に入ってから設立された奚疑塾には自由民権運動の影響がみえること、地域全体で塾を支える環境になっていたことを論じている。

さらに、奚疑塾の教育の目的や理念に着目し、奚疑塾の目的の一つに経済的な理由で教育が受けられない人も中等教育の機会を提供することが掲げられていたことや、塾の創始者自身が私塾を学習者の自己研鑽の場と考えていたことを見出している。また、奚疑塾が多数の同窓生を輩出していたこと、女子教育の役割も担っていたことから、地域の教育機会の拡大に寄与し大きな役割を果たしていた点を指摘した。さらに自己教育の方法を取り入れた他、塾に関わった人たちの書簡から塾生たちの支えあいの姿から、奚疑塾が地域における学校以上の存在であり、学校教育と通俗教育の役割を併せ持つ教育機関であったことを考察している。

### 第3章 近代の私塾における同窓生の研究—奚疑塾を対象として—

本章は、学習者の側面から奚疑塾の同窓生に焦点をあてた研究である。奚疑塾同窓生の動向をみることで、私塾の学びが青年にもたらした影響を考察した。奚疑塾が多くの同窓生を生んだ背景と奚疑塾の同窓生の足跡を取り上げ、奚疑塾の役割として次の3点を指摘している。第1は中等教育以降の学びを続けたい人にとっての予備校、第2は地域の政治経済のリーダーや教育者といった人材輩出、第3は塾で学びたい人の自己研鑽の場である。その意味で奚疑塾は、地域に基盤を置く多様な機能を持つ教育機関であったと捉えられると結論付けている。

### 第4章 奚疑塾における錦絵の研究—視聴覚教育の観点から—

本章は、奚疑塾の教育内容、教育方法の一端をみるため、奚疑塾に所蔵されていた錦絵を対象に取り上げ視聴覚教育メディアとしての意義を検討するものである。そして奚疑塾では教養を重視した基礎教育が中心であったこと、教育内容では歴史に関する学習、方法としては問答などで学んでいたことを指摘した。

また奚疑塾の錦絵の題材の整理から、歴史やニュースに関する錦絵が多く収集されており、教育的な意図を持って集められていたこと、歴史分野でも通史、時代別など、視覚的に歴史を学ぶことができる錦絵が多かったこと、塾での教科書の主題が錦絵にして所蔵されてこと、同時代の事件や世相などを描いた錦絵では、日常生活ではみることが難しい事柄を主題にしたものが収集されていることを明らかにした。

換言すれば、奚疑塾の錦絵は当時一般的に流通していた錦絵の主題傾向とは異なり、教育的な意図を持って収集されたこと、かつ歴史に関する事柄や文明開化などの内容を視覚的に理解するといった視聴覚教材の役割を果たしていることを見出している。

## 第3部 戦後直後期の三多摩における青年の社会教育実践—戦中からの復興と戦後社会教

育の出発—

## 第1章 第二次世界大戦下における三多摩の社会教育

第3部は戦中から戦後初期における三多摩の社会教育実践の展開を考察するものである。本章ではその前史として戦中における三多摩の社会教育を取りまく概況を論じた。

三多摩においても、東京に近い立地の影響から、多くの軍需工場が置かれていた。このことは、工場に設置された青年学校が学習機会を拡大したプラスの側面もあったが、一方で青少年団の組織化など、戦中のうねりの中にあった。三多摩の社会教育でも社会教育団体の組織化など、戦争の影響を免れ得なかったことを著者は指摘している。

## 第2章 戦後直後期稲城における青年の社会教育実践の実証的研究

本章は戦後直後期に軸足を置き、戦後の出発の時期に三多摩の社会教育実践がどのように展開されていたかの検証である。具体的には、戦後の稲城地域を対象に、1940年代後半における青年による学習・文化活動の事例に関して、証言を交えながら論じている。南多摩に位置する稲城地域においても戦後は学習・文化活動への期待の高まりとともに、地域が重要な社会教育実践の場となりつつあった。そして稲城村青年団を事例の一つに取り上げ、文化国家建設の目標を掲げつつ活動に臨む青年の意欲を見出した。

ここでは、地域密着型の美術鑑賞サークル「美を語る会」の活動を検証している。同会は地域の有力者のサロンのような活動であり、青年団とは異なる静かな文化への期待を持つ会であったこと、その一方で、多くの青年層の参加があり、サークル活動への関わりがその後の人生に影響を持っていたこと、一過性の活動の意味にとどまらない価値ある学びであったことに著者は着目している。また、青年教員による演劇及び人形劇の事例を取り上げ、活動をしていた人だけでなく、鑑賞する地域の人々にとっても娯楽として意義あるものであったという。

## 第3章 「ゴードン・W・プランゲ文庫」にみる戦後直後期の三多摩における青年の学習・文化活動

本章では、戦後直後期の文献コレクションであるプランゲ文庫に収載された小規模の出版物を対象に青年の社会教育実践を検討している。そして戦後直後期において書く実践に携わってきた人々の姿に迫り、特に青年団、学校、労働組合、地域でのサークル活動に従事する青年たちが書いた小規模な出版物、青年団の団報、労働組合での創作活動などを取り上げた。文化への渴望が高まっていた時代背景の中、敗戦という経験から立ち上がり、文化によって新生日本を創り出していこうとする思いは総じて共通していると著者は指摘する。

## 第4部 戦後三多摩社会教育史における橋本義夫及び「ふだん記」に関する研究—「ふだん記」から「自分史」へ—



## 第1章 橋本義夫の社会教育実践の一側面に関する研究

第4部は、戦前、戦中、戦後の三多摩を生きた八王子の実践家である橋本義夫及び「ふだん記」を対象とし、「ふだん記」をめぐる理論と実践を解き明かしながら、「自分史」の起源を再検証することを目的としている。橋本や「ふだん記」に関する文献と「ふだん記」を巡る人々の証言を交えつつ実証的に分析を行った。

本章では、橋本義夫に関する先行研究を概括し、橋本の社会教育実践家の側面を論じている。橋本や「ふだん記」は、社会学や歴史学などで研究対象として取り上げられてきたが、社会教育実践の視点からはこれまで論じられることがほとんどなかった。そのため、橋本の人生遍歴を検討しつつ、橋本の実践を社会教育として読み解いている。そして学校での経験に失望を感じていた橋本が、のちに青年の学習運動への参加、書店・揺籃社の設立とそこに集う人々との交流、さらにこのつながりから生まれた教育科学研究会の実践など、精力的に学習・文化活動に取り組んでいたことを論じた。

戦後に入ってから橋本は建碑運動、さらに三多摩の地域文化に関する執筆活動などに取り組んできた。これらは地域の記憶を文字や文章という形で残すようつとめた実践であり、「ふだん記」の創始につながっていることを著者は示している。「ふだん記」を生んだ橋本が、多様な文化に従事しながら「ふだん記」を着想したと分析する視点は、その後の「自分史」につながる源流を三多摩の地域文化活動に求めることができるという意味で重要な指摘と考えることができよう。

## 第2章 橋本義夫の学習論研究—「ふだん記」を対象に—

本章では「ふだん記」が人々に受け入れられながら活動を拡大していく姿に迫っている。まず橋本の文章執筆に関する言説を整理し、鍵概念の抽出をした。橋本の学習論は実践の中で確立してきたものであり、「私でも書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」、「文章は手紙にはじまる」、「だれでも本が作れる」などの「書く思想」により成り立っていると指摘している。

さらに、橋本の「書く思想」を万人教育主義、易行道主義、平等主義、地域主義として検証し、多くの人々が文章を書く実践に参加できるように支援する考え方であると論じた。特に、橋本が「ふだん記」の普及にあたり参照した書籍を取り上げながら「ふだん記」の背景にある易行道の考えを探った。こうした「ふだん記」の理念がどのように文友たちに受容されたかを、文友の語りから実証的に迫っている。

## 第3章 「ふだん記」における青年の学びに関する一研究

本章では、橋本や参加した若年層が書き記した「ふだん記」の文章の分析により、「ふだん記」にみられる青年論を実証的に解明することを試みた。橋本の青年に対する思いの出發は、自身が学校時代において経験してきた挫折とそれがもたらす劣等感が根底にあったと著者は指摘する。

さらに、橋本の雑誌連載記事「青年版『ふだん記』のすすめ」の分析を通じて橋本の青年論に迫ろうと試みた。そこで橋本は「ふだん記」の書き方を示しながら、まず活動をすることの重要性を説いていること、「万人の可能性」を徹底的に信じ青年が可能性を伸ばすための具体的方策の一つに「ふだん記」を執筆することを考えていたとする。また橋本は、青年の得意な事柄をみつけて、その部分を指導して伸ばすことを主張していたとする。

#### 第4章 ナラティブの視点からみた書く実践に関する一研究

本章では、「ふだん記」をナラティブ（語り）の視点から考察した。そして具体的な対象にある一人の「ふだん記」本が完成するまでの過程を、書き手と橋本の手紙などのやり取りから分析している。「ふだん記」の執筆者が、「ふだん記」本の執筆過程で橋本から励ましや指導などを手紙から受けており、本の執筆者と支援者の協働により本が作り出されるまでの過程を、ナラティブとして分析することを試みている。新しい手法として注目できよう。

#### 第5章 書く実践の意義に関する一研究—「ふだん記」を対象として—

本章では、書く実践が書き手の長い人生の中でどのような影響を及ぼすのかという問題意識から、インタビュー調査を実施した。具体的には、ライフストーリーとの関わりから、4人の「ふだん記」文友を取り上げ、自らの生きてきた来歴の文章化により、それぞれの生き方にポジティブな影響をもたらしていることを実証的に明らかにしている。

#### 第6章 「ふだん記」と「自分史」の一考察—橋本義夫による実践の再評価—

本章は「ふだん記」と「自分史」の比較研究である。「自分史」の語の起りを整理しつつ、色川大吉の造語であるといわれる「自分史」の語が生まれた念頭には「ふだん記」の存在があることを示している。

さらに、「ふだん記」、「自分史」の書き方を対照し、執筆者の考え方を入れながら書き進めるといふ共通点があること、両者の記述内容の分析から、「ふだん記」は「自分史」の直接の原型であることを明らかにした。

さらに、「ふだん記」は、学校教育の枠におさまりにきれいな存在を包摂する社会教育の重要な学習実践であること、を、明らかにしている。

#### 補論1 1980年代創始の各地グループに関する研究—「ふだん記」北九州グループ、あいちグループを対象として—

本論文で取り上げた二つの補論は、三多摩に生まれた「ふだん記」が、その後どのように全国的な広がりを見せているか、実証的に迫ったものである。補論1での研究対象は、1980年代に創始された二つの各地グループ、「ふだん記」北九州グループとあいちグループである。各地グループの概要を示したうえで、北九州グループ、あいちグループの文友の

実像を論じている。また、それぞれの地で人々の生を綴る場の一つとなってきた意義を示している。

## 補論2 地域における学習・文化活動の受容過程に関する研究—北海道における初期「ふだん記」を対象にして—

補論2は北海道における各地グループの初期の活動を対象にした研究である。全国各地に広がっている「ふだん記」のグループ活動をみるうえで特に重要な存在として著者は北海道に着目する。その理由として、道内だけで六つ（旭川、札幌、江別、北見、帯広、留萌）と最多の数を誇ってことや、道内の各地グループの集まりである全道交流会など、活発な実践を行っていることを指摘している。補論2では、「ふだん記」が北海道に芽吹き、根付くまでの初期の北海道「ふだん記」を追い、学習・文化活動の広がり进行を考察した。三多摩の水脈の上に培われてきた「自分史」の表現活動が、全国に普及していることを検証した点で興味深い論考となっている。

## 結論

以上の各章の分析から、以下の結論が導き出されている。第一は、近現代三多摩の約150年にわたる地域社会教育の歩みを俯瞰すると、様々な学習活動が出現し、学習活動の中でリーダーが育ち、そのことでさらに新たな学習活動が展開するといった学びの循環が見いだされることである。明治期以降、橋本が戦後に創始した「ふだん記」に至るまで、三多摩では明治期の学習結社での討論、大正期の小学学齢外者を対象にした私塾、戦後直後期のサークル活動などが展開され、地域は時代の変遷にも変わらず学びの場となってきた。こうした三多摩における学習活動の積み重ねが実践家、思想家、教育家といった学びのリーダーを生み出し、そこからさらに多様な活動が生まれるという学びの好循環が三多摩には生まれてきたことを、著者は論じている。

第二に、三多摩における近現代の地域社会教育史をみると、いわば基盤として「書く思想」が醸成されていたことが指摘されている。例えば、大正期の地方新聞の投書欄、地域文芸誌、戦後直後期の各種のミニコミがある。三多摩では書くことで、人々がつながり、いわば「書くコミュニティ」が形成され、三多摩の文化的な土壌の中で脈々と受け継がれてきたことに他ならない。「自分史」の源流を考えるうえで、三多摩という地域における文化的な土壌、そこにおける「書くコミュニティ」の形成は看過できないとする。またあわせて「読むコミュニティ」にも注目している。

第三として、橋本の学習論の根底に「書く思想」があることを明らかにしている。本論文では、橋本の作品を学習論の観点から分析を行い、「私でも書ける、書けない者なし」、「下手に書きなさい」、「文章は手紙にはじまる」、「だれでも本が作れる」などの「書く思想」により成り立っていると論じた。また「書く思想」について、万人教育主義、易行道主義、平等主義、地域主義を見いだした。

第四は、「自分史」の源流として「ふだん記」があることを再検証している。本論では、「ふだん記」と「自分史」で取り上げられている作品を対象として取り上げ比較しながら、「自分史」の直接の原型が「ふだん記」にあることを明らかにした。その意味で「自分史」の源流は橋本義夫の「ふだん記」にあることが再発見されたとも言えよう。社会教育史研究の上で意義のある論証になっていると考えることができる。

#### 4、総評

以上、本論文の目的、構成、各章の概要と論評をおこなってきたが、最後に、総評を述べておきたい。

(1) 本論文は、明治期以降の東京西部・三多摩における地域社会教育の歴史を「自分史」の表現活動という視点から検証し、「自分史」の起源ともいわれている「ふだん記」の成立、展開を、社会教育の観点から考察したものである。

本研究の意義として、第一に、近現代三多摩の約 150 年にわたる地域社会教育の歩みを「自分史」という観点から通史的に検討していることにある。これまでの先行研究においては、限られた時期あるいは特定の実践についての分析はなされているが、通史的、総合的な研究としては本論が初めての試みであり、その点を評価したい。地域での学習という営みに関わってメディア、とりわけ地方新聞や文芸誌などにも着目し、それが地域での学習支援に重要な役割を果たしたことを明らかにした点は斬新である。

三多摩地域における学習活動の積み重ねがリーダーを生み出し、さらに多様な活動が展開するという学習活動の循環が三多摩には生じていること、また、「書くコミュニティ」と併行して「読むコミュニティ」が形成されてきたことに注目し、そのことが、「ふだん記」という自分史の実践に結びついていった過程を精緻に論証している点に注目したい。

第二は、本論執筆にあたって、明治期以降の膨大で多様な社会教育の関連資料を収集・整理し、一つひとつ社会教育としての意味を検討していることがある。それ自体、著者の史料に誠実な研究姿勢を示すものであろう。また、その作業をふまえ、橋本義夫の実践に注目し、「ふだん記」の活動を、実証的に論じている。

三多摩地域を対象とした戦後社会教育研究では、系統的組織的な社会教育活動が注目されてきた一方で、地域のノンフォーマルな学習・文化活動については、見過ごされる傾向にあった。地域住民の学習活動の展開について、歴史的な考察も充分ではなかった。本論文では、橋本義夫の実践について、三多摩における社会教育実践の歴史的な系統の中に、新しい視角から位置づけている点を評価したい。

第三には、三多摩地区に加え、全国各地に散逸している橋本および文友の「ふだん記」に関わる膨大な文章を収集整理し、さらにインタビューを実施した上で、橋本の実践を学習論の観点から分析している点である。橋本の「書く思想」を、万人教育主義、易行道主義、平等主義、地域主義という概念として析出している。何よりも学校教育における教科

書的な綴り方という概念を崩した橋本の文章教育の先駆性を、本論文は提示している。

橋本は地域での書く実践において、類い希な指導者としての役割を果たし、その思想と方法は、全国的な「自分史」の発展へとつながっていった。本研究は「自分史」の思想的源流を丁寧に掘り起こしている。また補論における「ふだん記」の九州、北海道での検証は、今後の全国規模での研究の出発点を予感させるものがある。

(2) 本研究に対しては若干の課題が指摘される。それらをまとめるならば、以下のようになる。

第一に、戦前の生活綴方、1950年代の生活記録運動など他の書く実践との比較研究が不足している点である。元来、日本の社会教育の中で大人が書くことは、重要な役割を果たしてきたが、書く実践を生み出す土壌の形成過程を解き明かすには、より多様な学習・文化活動を比較検討する必要がある。人々はなぜ自分のことを書くのか、どのような要因が人々をして文章を書かせるのか、自らのことを文章に書いた人々は、その学びを経てどう成長していくのか、今後の一層の検証が求められている。

第二に、本論文において、橋本と文友との関係については論じられ橋本の言説や指導・援助の特徴を考察しているが、文友相互の関係性については、必ずしも展開が充分とは言えない。文友同士の関係があったからこそ、ふだん記は全国に広がり、また「自分史」へとつながっていったと思われる。継続的な探究が必要であろう。

しかし、これらの課題は本論文の価値を減じるものではなく、今後の研究課題として位置づけられるものである。著者の研究意欲と人々の書く実践の実態に迫ろうと試みる丹念な調査は評価すべきであり、今後の研究成果に期待したい。

以上の諸点から総合的に判断して、審査員一同、本論文が博士（教育学）に値するという結論に達したので、ここに報告する。